

文徳天皇の皇女は二十名。うち内親王十名。賜姓源氏七名。残り三名は女王（養女、実父源能有）である¹。今回は賜姓源氏である七名の皇女について考察する。簡単な関連年表を考察の最後に付した。参照していただきたい。

『本朝皇胤紹運録』によれば、この七名のうち、馮子・謙子・奥子・列子・済子以上五名は仁寿三年（八五三）に賜姓され、富子と滋子（淵子）の二名は貞観三年（八六一）に賜姓された。

『文徳天皇実録』仁寿三年（八五三）六月十一日条
皇子能有。時有。本有。載有。皇女馮子。謙子。列子。済子。奥子等。賜姓源朝臣。隸左京職。行前日詔也。

んどであり、戸籍の筆頭には載せられないことから、年上という可能性もある。

文徳天皇は嵯峨天皇や仁明天皇の例に倣い、一部の皇子女の臣籍降下を行った²。「但し前に親王を号すは此の限りに在らず。同母後産、亦復して一例とす。」として、臣籍降下の基準も同様とした。林陸朗氏は文徳源氏について、賜姓は生母による区別が明確であるとし、その命名方法と、第一源氏である源能有が承和十二年（八四五）生まれであることから、文徳天皇が皇太子であったときにすでに源氏賜姓者が生母によつて区別予定されていたと推測されている⁴。仁寿三年（八五三）に賜姓された五名の皇女はみな生母の氏はどこにも記載されず不明である。男子は他の史料から母の氏族が判明している。伴氏（能有母）、丹墀氏（每有母）、清原氏（時有母）である。また貞観三年の賜姓者の生母の出身は布勢氏（行有母）、菅原氏（富子）、滋野氏（淵子）である。このことから推して仁寿三年（八五三）の皇女の生母も同等の氏族であろう。記載されなかったのは、これらの氏族よりも若干弱小氏族であったか、或いは記された者

『三代実録』貞観三年（八六一）四月二十五日条
廿五日己巳。文徳天皇皇子。男二人女三人。未定名号。是日。或爲親王。或爲朝臣。惟恒親王。禮子内親王並母藤原「朝臣」氏。源朝臣行有母布勢氏。源朝臣富子母菅原氏。源朝臣淵子母滋野氏は也。

八年の時を隔てて、二回の賜姓の記事があることから、馮子以下五名の皇女と、富子以下二名の皇女の年代にはそれなりの開きがあると考えられる。

仁寿三年（八五三）に賜姓された皇子女の筆頭に挙げられている能有は寛平九年（八九七）に五十三歳で亡くなっている³。逆算すると、仁寿三年（八五三）時点は九歳となる。憑子、謙子、列子、済子、奥子もほぼ同年代と思われる。女子は男子の後に記述される場合がほと

と同族・傍流であったかと推測される。他姓ではなく源姓を賜ったことからみて全く不明であったわけではなく、省略されただけであろう。これは「統」姓を賜り、『帝王編年記』に「母不明」と記される淳和天皇皇女、統朝臣忠子とは異なるということである。

源馮子は、『帝王編年記』『一代要記』によれば、從四位上であつた。また『帝王編年記』では馮子のみが源氏の皇女として記載されていることからいつて賜姓された皇女の中では最年長と考えられる。文徳天皇は十八歳のときに紀静子との間に惟喬親王を儲けており、惟喬親王がもつとも年上の子と考えられているので、馮子が惟喬親王と同じ年に生まれたとしても能有よりは一歳年上となる。

仁寿三年（八五三）の賜姓者の中で、今ひとり從四位上と判明している源済子は『三代実録』貞観九年（八六七）八月二十九日、詔によつて清和天皇の女御になった。

廿九日乙未。詔以源朝臣済子爲女御。

翌貞観十年（八六七）の正月に済子は従四位上を直叙された⁵。これは明らかに女御になったためである。「詔によつて」とあるので、清和天皇自身か或いは藤原良房の意図するところであろう。この前年、貞観八年（八六六）には史上名高い応天門の変があり、九月に伴善男が死一等を減ぜられて遠流となつてゐる。貞観十年（八六七）十二月には清和天皇の皇子貞明（後の陽成天皇）が誕生している。こうした社会情勢から考えても済子が入内した要因は、清和天皇の側にあったと考えられる。

済子の生母は不明であるが、祖母が多治氏であり、目立つた係累がほかになかった。そうしたことから、あるいは応天門の変の後、はやくに清和天皇の身辺を落ち着かせ、変のことから目をそらすために、藤原良房が、なるべく藤氏と競合しない、しかし格式のある源氏を入内させたと疑える。

『三代実録』元慶三年（八七九）三月七日程には清和上皇は事実上の後宮整理を行い、済子ほか十一名の季料月俸は一斉に停止された。

二十九歳、先妣、世を下つて後一十三年」と父である文徳天皇が崩御してから二十九年たち、母が亡くなつてから十三年たつことが記される。そして今祖母まで失つて孤独になつたと述べられるが、どちらの願文にも六年前に崩御した伴侶でもあり異母兄でもあつた清和天皇についてとはなら記されない。直接に血のつながつた間柄でないといえはそれまでであるが、願文には父文徳天皇と母について繰り返し述べられ、死後の世界でも父と母が共にあることを想い描いている。済子の場合には清和上皇の落飾に伴つて季料月俸が停止されていること、願文に「弟子、人間に在ると雖も、已に薄祐と為す」とあることから、清和天皇との絆は浅く、おそらくは後宮での位置がその他大勢の中の一人でしかなかったと考えられる。

済子の生母の氏姓（すなわち外祖父の氏姓）は明らかでない。唯一外戚として明らかな外祖母的多治氏について述べれば、多治氏とは「上古以来の大姓にして数流あり」といわれる多治比氏のことである⁷。丹墀・丹比等いくとおりかの表記の違いはあるが、みな同じである。

『三代実録』元慶三年（八七九）三月七日程

停太上天皇女御従二位藤原朝臣多美子、従四位上嘉子女王、従四位上兼子女王、忠子女王、正四位下平朝臣寛子、従四位上源朝臣済子、従四位下源朝臣巖子、藤原朝臣頼子、正五位下源朝臣暄子、藤原朝臣佳珠子、源朝臣宜子十一人季料月俸。縁太上天皇勅也。

『菅家文草』卷十二には、済子が仁和二年（八八六）、および三年（八八七）に外祖母である多治氏の死を悼んで寄せた願文（六六〇・六六一）が残されている。最初の願文に祖母が亡くなったことによつて「孤の又孤なる」とあり、翌年のものにも「孤露の悲しみ」とあつて、繰り返し、孤独となつた悲しみが述べられる。母が亡くなったのが、十三年前の貞観十六年（八七四）。済子はおそらくただ一人残された肉親である祖母とともに暮らしていたと思われる。願文には「聖霊、登霞の災いと雖も、先妣、逝水の痛みと雖も」と父母を失つた嘆きが語られる。このことは後の願文でも「聖霊、昇遐して今

天長九年（八三二）四月二十五日、多治比真人成が入唐に際して「多治比」から「丹墀」とした。しかしその後貞峯がもとの「多治比」に戻し、さらにそれを「多治」の二字表記とした旨を奏上し許可された。

この氏族からは桓武後宮に多治比真宗（夫人）と多治比豊継（女孀）が入っている。真宗所生の皇子女はすべて親王である⁸。豊継所生の皇子女は長岡姓を賜っている。嵯峨後宮には多治比高子（夫人）¹⁰。淳和後宮では丹治比池子（従五位上）、所生の皇女は同子内親王である¹¹。そして文徳後宮では源毎有の母が丹墀氏である。清和・陽成の後宮にはいないが、次の光孝天皇の後宮には源緩子の母がいる。丹墀氏所生の文徳皇子についていえば、毎有は天皇が崩御する五ヶ月前に清原氏所生の時有とともに殿上で落髪入道した¹²。病がちであつた父文徳の快癒を願つたのであろう。

次に貞観三年（八六一）に賜姓された母の氏名が判明している富子と淵子であるが、このうち淵子の母は滋野岑子である。『三代実録』貞観元年（八五九）十二月二十二日程の滋野貞雄の卒伝に次に様に記されている。

女從五位上岑子。文德天皇納之。誕二皇子二皇女並賜姓源朝臣。

貞雄の娘である岑子は文德天皇の後宮にあつて二人の皇子と二人の皇女を産んだ。二人の皇子とは源本有と戴有である。皇女の方はやや問題があり、『三代実録』貞観三年に記述される〈淵子〉と、『本朝皇胤紹運録』にみえる〈滋子〉であろうか。しかし『本朝皇胤紹運録』頭注では〈滋子〉と『三代実録』に記載される〈淵子〉は同一人物であるとする。字形が似ていること、『本朝皇胤紹運録』の〈滋子〉は「滋野氏の娘」という意味あいを持つ可能性があること、また同母姉妹の場合、年長者を代表させることがままあることを考慮すると現段階では、滋子と淵子は同一人物と考えたほうが妥当であろう。本稿では『三代実録』の表記を優先して〈淵子〉をとる。

二皇子の本有と戴有はともに仁寿三年（八五三）に賜姓されており、改めて淵子が貞観三年（八六一）に賜姓

されていることから、淵子はこの間に出生したと考えられる。文德天皇は天安二年（八五八）八月に崩御しているので、最後の皇女は遅くとも貞観元年（八五九）には誕生していたことになる。外祖父である滋野貞雄は同年十二月に卒去しているので、最後の孫娘を目にして後、彼岸に旅立ったであろう。生母岑子は貞観九年（八六七）に従五位上を直叙された¹³。淵子が亡くなったのは、延喜十一年（九一一）四月十二日である¹⁴。先に記した可能性のある誕生年の幅から考えると五十一歳から五十九歳の間であつたことになる。

なお滋野氏は、貞雄の兄である貞主も、二人の娘のうち姉繩子を仁明後宮に、妹奥子を文德後宮に入れている。繩子・奥子所生の皇子女はすべて親王号を賜つており、滋野氏嫡流と傍流との相違がはっきりと示される¹⁵。

母が菅原氏とされる富子については、源定有の母が菅原氏と考えられるので同母か、そうでなくとも富子母は菅原氏の傍系であろう。『本朝皇胤紹運録』によると定有の母は「管〔菅敷〕野氏」となっている。『帝王編年記』では「母菅原氏」である。定有は『三代実録』仁寿

三年（八五三）賜姓の条では名前があげられていないが、『本朝皇胤紹運録』『一代要記』では「仁寿三年賜姓」と記される。林陸朗氏は「以後の経過などからみると、『文德実録』の記事の誤脱と認むべきであろうと思う。」と述べられている¹⁶。最終官位は正四位下大藏卿であつた。富子は文德源氏の氏長者である能有に加え、同族の定有とも近い繋がりをもっていたのであるから、賜姓源氏として格式を保つには十分であつたといえる。

以上、文德源氏であるこれらの皇女たちの記述は他にはなく、その生涯はほとんどわからないというのが実状である。しかし済子のように後宮に入ったり、あるいは嵯峨源氏潔姫のように臣下に嫁したり、潔姫の妹である源全子のように尚侍として宮中での任につけば、それなりの記録が残されたはずである。それが無いということ、賜姓された皇女として源氏の長者の庇護のもと、あるいはそれぞれの氏族の庇護のもと、大切にかしづかれてその生涯を全うしたと考える以外にはない。

文德天皇の後宮を概観すると賜姓された源氏の生母の出身は菅原氏・滋野氏・伴氏・丹治比氏・清原氏・布

勢氏等々と多彩である。次代清和天皇の後宮は人数こそ多いものの、ほとんどが藤原氏と源氏に占められている。既に歴史的通説となつてゐる応天門の変を境とした藤氏専有は、後宮政策に何よりも典型的にあらわれている。これら賜姓源氏を出した氏族のうち伴氏と滋野氏以外は、公卿にこそ列していないがそのすぐ下で朝堂を支えていた中堅の勢力であり、又いにしえの名族であつた。賜姓された皇子には能有、正三位右大臣。大藏卿正四位下定有、治部卿正四位下本有がいる。嵯峨天皇は賜姓源氏に皇親勢力として天皇を支えることを期待したが、これは文德天皇もそれに倣つたといふことを示している。結果的には藤原氏に対抗しようもなかったかもしれないが、文德天皇はいたずらに皇子女を増やしたわけではなく、ある意図をもつて後宮にこれらの皇子女の生母を迎えたのであろう。だとすれば、氏名が記載されていない皇女の生母も文德天皇の信頼を得た氏族の出であり、皇女たちは文德天皇との絆を意味する大切な存在であつたはずである。

844	4	1月	推賢親王（紀靜子所生）、誕生
845	5	（承和十二年）	源能有（伴氏所生）、誕生（逆算による）
850	3	（寛承三年）	惟仁親王（藤原明子所生・清和天皇）、誕生
853	3	（仁寿三年）	惟仁親王（清和天皇）、立太子
857	2	（孝衡四年）	源能有（伴氏）、源時有（清原氏）、源本有および藏有（滋野岑子）、源徳子・源謙子・源列子・源濟子・源興子に賜姓。
858	3	（天安二年）	源俊有（丹墀氏）、源定有（菅原氏）もこのとき賜姓か。
859	3	（文德天皇、崩御（三十二歳）	源俊有・源時有・入道
861	4	（貞観三年）	滋野貞雄（男子父・源淵子外祖父）卒
866	3	（貞観八年）	源行有（布勢氏）・源富子（菅原氏）・源淵子（滋野岑子）に賜姓
867	9	（貞観九年）	伴善男、配流
868	10	（貞観十年）	源濟子、清和後宮に入内（女御）
874	4	（貞観十六年）	源濟子母、亡くなる
876	11	（貞観十八年）	清和天皇、讓位
879	3	（元慶三年）	源濟子等の季料月俸の停止
880	12	（元慶四年）	清和上皇、崩御
886	5	（仁和二年）	源濟子祖母多治氏、亡くなる
887	7	（仁和三年）	源濟子、七七日追福願文（菅原道真）
897	6	（寛平九年）	源能有、薨（五十三歳）
911	4	（延喜十一年）	源淵子、薨（五十一歳〜五十九歳）

●注

1 柄子女王・敏子女王・照子女王。実父、源能有は文徳天皇皇子である。

2 『公卿補任』寛平九年

3 『文徳実録』仁寿三年（八五三）二月二十日条
制曰。利國通規。公謙爲本。安民茂躋。損挹厥初。朕薰腴末施。化跡仍疎。恐黎氓之不親。望列辟以慙德。而今所生男女。皆當享封爵之重。疏湯沐之用。思其煩費。内以忸怩。竊見。乃祖聖皇。貽厥之謀。除親王之号。賜朝臣之姓。奕代相沿。已爲成式。誠宜陶聖風而長扇。共源氏而混流。但前号親王。不在此限。同母後産。亦復一例。慶雲之惠。既無愛憎。若樹之華。更有濃淡。盖以。域中大寶。在屈己以利人。天下至公。欲損上以益下。普告中外。咸俾聞知。

4 『上代政治社会の研究』（昭和四十四年・吉川弘文館）二八三頁

5 『三代実録』卷十五・貞観十年正月八日条
始講勝王經於大極殿。以延曆寺僧天台宗傳灯大法師位法勢爲講師。主殿允正六位上若湯坐連仁高。左近衛醫師紀宿祢春生並授外從五位下。從四位上潔子女王正四位下。從四位下嘉子女王從四位上。從五位下善宗女王從五位上。無位源朝臣濟子從四位上。源朝臣貞子從四位下。從五位下源朝臣高子。藤原朝臣子並從五位上。紀朝臣靜子。春

澄朝臣高子。藤原朝臣雲子。小野朝臣氏野並從五位下。

6 『菅家文章』卷十二（六六〇／六六一）

7 太田亮氏『姓氏家系大辞典』

8 葛原親王・佐味親王・賀陽親王・大野親王・因幡内親王・安濃内親王である。

9 長岡豊成。母の身分が女孀であつたために長岡姓を賜つたと考えられる。

10 所生の皇子女はなし。

11 『三代実録』では池子、『本朝皇胤紹運録』『帝王編年記』『一代要記』では常子となっているが、同一人物である。また同子内親王（『三代実録』『帝王編年記』『一代要記』も国子（『本朝皇胤紹運録』と揺れがある。詳しくは「皇女総覧十三」（『聖表十一号』平成十二年六月）参照。

12 『文徳実録』卷十・天安二年（八五八）三月十五日条「是日。召會諸司諸別所能書者。於常寧殿。初令寫般若波羅蜜多理趣經百卷。于時皇子源每有。時有。於殿上落髮入道。此夜有灌頂之事。（二人者皇子之得姓者也。每有母多治氏。時有母清原氏。）」

13 『三代実録』卷十四・貞観九年（八六七）正月八日甲斐介正六位上藤原朝臣安繩。近江權少掾正七位上安倍朝臣利柯並授從五位下。内匠大允正六位上賀祐臣祖繼。「授」近江國夷外從六位下爾散南公河繼並外從五位下。

從五位上藤原朝臣興子從四位下。從五位下藤原朝臣高子。林朝臣氏子並正五位下。无位滋野朝臣岑子從五位上。外從五位上江沼臣河子。大和朝臣仲子。无位藤原朝臣佐美子。小野朝臣後賢子。田中朝臣原子。和朝臣宜子並從五位下。无位紀朝臣全子。賀陽朝臣乙三野並外從五位下。¹⁴『一代要記』文德天皇¹⁵「皇女總覽十六」(「瞿麥十四号」平成十三年十一月)¹⁶『上代政治社会の研究』(昭和四十四年・吉川弘文館)二八二頁

●史料

史料の頭の数字は西暦、() は筆者補足、(^) 割り注

【源馮子】母、不明／同母姉妹、不明／最終位、從四位上

853 (仁寿三年六月十一日) 皇子能有。時有。本有。載有。皇女馮子。謙子。列子。濟子。奧子等。賜姓源朝臣。隸左京職。行前日詔也。『文德天皇実録』

文德天皇：源馮子 (從四上) 『本朝皇胤紹運録』
文德天皇 (女源氏)：女源氏朝臣馮子 (從四位上) 『帝王編年記』
文德天皇 (皇女)：憑子 (從四位上) 『一代要記』
文德天皇 (女賜姓)：源馮子 (從四上) 『皇代記』 (新校群書類從卷三十二)

【源謙子】母、不明／同母姉妹、不明／最終位、不明

853 (仁寿三年六月十一日) 皇子能有。時有。本有。載有。皇女馮子。謙子。列子。濟子。奧子等。賜姓源朝臣。

隸左京職。行前日詔也。『文德天皇実録』

文德天皇：源謙子 『本朝皇胤紹運録』

文德天皇 (皇女)：謙子 『一代要記』

文德天皇 (女賜姓)：謙子 『皇代記』 (新校群書類從卷三十一)

【源奧子】母、不明／同母姉妹、不明／最終位、不明

853 (仁寿三年六月十一日) 皇子能有。時有。本有。載有。皇女馮子。謙子。列子。濟子。奧子等。賜姓源朝臣。隸左京職。行前日詔也。『文德天皇実録』

文德天皇：源奧子 『本朝皇胤紹運録』

文德天皇 (皇女)：奧子 『一代要記』

文德天皇 (女賜姓)：奧子 『皇代記』 (新校群書類從卷三十一)

【源列子】母、不明／同母姉妹、不明／最終位、不明

853 (仁寿三年六月十一日) 皇子能有。時有。本有。載

有。皇女馮子。謙子。列子。濟子。奧子等。賜姓源朝臣。隸左京職。行前日詔也。『文德天皇実録』

文德天皇：源列子 『本朝皇胤紹運録』

文德天皇 (皇女)：列子 『一代要記』

文德天皇 (女賜姓)：列子 『皇代記』 (新校群書類從卷三十一)

【源濟子】母、不明／同母姉妹、不明／最終位、從四位上

853 (仁寿三年六月十一日) 皇子能有。時有。本有。載有。皇女馮子。謙子。列子。濟子。奧子等。賜姓源朝臣。隸左京職。行前日詔也。『文德天皇実録』

867 (貞觀九年八月二十九日) 廿九日乙未。詔以源朝臣濟子為女御 『三代実録』

868 (貞觀十年正月八日) 始講勝王經於大極殿。以延曆寺僧天台宗傳灯大法師位法勢為講師。『主殿允正六位上

若湯坐連仁高。左近衛醫師紀宿祢春生並授外從五位下。從四位上潔子女王正四位下。從四位下嘉子女王從四位上。從五位下善宗女王從五位上。無位源朝臣濟子從四位上。源朝臣貞子從四位下。從五位下源朝臣高子。藤原朝臣子並從五位上。紀朝臣靜子。春澄朝臣高子。藤原朝臣雲子。小野朝臣氏野並從五位下。『三代実録』

879 (元慶三年三月七日) 停太上天皇女御從二位藤原朝臣多美子、從四位上嘉子女王、從四位上兼子女王、忠子女王、正四位下平朝臣寬子、從四位上源朝臣濟子、從四位下源朝臣嚴子。藤原朝臣賴子、正五位下源朝臣喧子、藤原朝臣佳珠子、源朝臣宜子十一人季料月俸。緣太上天皇勅也。『三代実録』

880 (仁和二年七月十三日) 為清和女御源氏外祖母多治氏七ノ日追福願文。仁和二年七月十三日。

弟子 從四位上源朝臣濟子、敬白。弟子外祖母多治氏、去五月廿九日厭弟子而不顧、未知向於何方。弟子今於佛前、請其拔苦與樂。

遊戲。若令宿昔誓願于今不變、定知先妣侍聖靈轉輪之宮。若令此朝善根在彼有緣、定知祖母昇先妣架蓮之座。弟子雖在人間、已為薄祐。願我以此一念、值遇於三尊。大鐵圍之外、恆沙界之中、一ノ廻向、共成福樂。敬白。
『菅家文章』卷十二・六六〇 (日本古典文学大系)・『本朝文集』

887 (仁和三年十一月二十七日) 為清和女御源氏修功德願文。仁和二年十一月二十七日 (恐當作仁和三年)。

弟子 從四位上源朝臣濟子、恭敬奉繪延命帝釋、一字等菩薩像。弟子前年作念、所以者何。每見泡影之有為、每逢露電之不定、歸命此三菩薩。庶幾彼有冥祐、今之採圖果宿心。又更奉圖觀世音菩薩像、何以故。請弟子逆五七之證明也。弟子伏惟、聖靈昇遐、于今二十九歲。先妣下世後一十三年。孤露之悲、寒溫已累、浮雲之質、變滅何時。況身之數奇、家之單祚、今而不營功德、後亦更屬何人。弟子欲修此善、先問因緣。台嶽非婦人之可攀、仁祠豈塵累之所觸。至心苟合、如來不現誰家。稽首惟勤、淨界不移何處。是以弟子灑 (灑字、本朝文集作洒) 掃幽

弟子昔日新生、依託祖母之後、祖母今年微病、未拋弟子之前、雖災聖靈於登霞、雖痛先妣於逝水、憑祖母之摩頂、慰弟子之斷腸。我今無所依、我今無所託。云憂云喜、孰為相謀。或起或居、孰為相護。悼而重悼、孤之又孤、如是酸辛、皆悉罪報。嗟嗟夏月 (月字、本朝文集作日) 先過、秋風已吹。簾影空垂、砌塵未掃。哀不能斷、時不可留。今歸尊靈殞命之舊窓、當修四十九日之功德。

尊靈去年五月宿痾乍發、殆及危急。弟子當時作念、欲奉圖繪帝釋菩薩。雖去年所願與今年相違、而事死之誠、與事生何異。是故弟子抑淚廻謀、莊嚴此像 (帝釋菩薩)。又弟子新發意、奉寫金字法華經一部八卷、無量義經、普賢觀經、般若心經各一卷、轉女成佛經二卷。一 (一字、一本作大) 乘之法、是無二無三也。弟子之心、亦無二無三也。唯有一法、唯有一心。以斯妙理、捨資尊靈。弟子不知尊靈所住、何世界、何須彌、就何生、入何道。常樂我淨、布慈雲以奉導尊靈、開示悟入、施惠雨而奉翊尊靈。紺瑠璃紙、變為證菩提之地、黃金泥字、散為成正覺之花。假使尊靈速離塵垢、得住三明、願弟子暫引瓔珞、夢中再遇。次願聖靈山陵奉增遍周之威光、過去先妣奉加安樂之

闍、排展禪座、晝則供養四菩薩之尊像、夜又收拾 (板本旁注拾イ) 三聚戒之明珠。百和熏香、纔採舊年之匣底、一枝殘萼、適折寒月之簾前。以清淨為宗、以真實為本。今朝萬事、近取諸身而已。

凡厥所得善根、先獻田邑山陵。反覆而恐、欲罷不能。猶願奉添白毫之末光、將表丹懇之遠志。復次奉導先妣尊靈。星霜雖積、割腸之悲在今。松檟雖老、泣血之淚如昨。仰願上方下方、若南若北、在ノ處、將益莊嚴。

弟子伏尋往年、與弟子常發願者、斯乃外祖母多治氏也。天也亦天也、可悲又可悲。祖母去夏乍出閻浮、弟子此冬逾纏哀慕。發心之次已斷、增長福壽之思。結願之終空念、速證菩提之誓。悔而不及、言以無微。請寄勝因、早成佛果。弟子現世當生、共成所願。其餘多少福惠、普及無邊。
『菅家文章』卷十二・六六一 (日本古典文学大系)・『本朝文集』

文德天皇：源濟子 (已上。仁壽三年賜姓) ※「已上」は馮子から濟子までを指す。『本朝皇胤紹運録』
文德天皇 (皇女)：脩子『一代要記』

清和天皇（後宮）：女御源濟子（從四位上貞觀九年八月日為女御『一代要記』）

文德天皇（女賜姓）：濟子『皇代記』（新校群書類從卷三十一）

清和天皇（妻后）：源濟子『皇代記』（新校群書類從卷三十一）

【源富子】母、菅原氏／同母姉妹、不明／最終位、不明

861（貞觀三年四月二十五日）廿五日己巳。文德天皇皇子。男二人女三人。未定名号。是日。或為親王。或為朝臣。惟恒親王。禮子內親王並母藤原「朝臣」氏。源朝臣行有母布勢氏。源朝臣富子母菅原氏。源朝臣淵子母滋野氏是也。『三代実録』

文德天皇：源富子（貞觀三賜姓。母菅原氏）『本朝皇胤紹運録』

文德天皇（皇女）：富子（貞觀三年四月賜姓）『一代要記』

文德天皇（女賜姓）：富子『皇代記』（新校群書類從卷三十一）

【源淵子】母、滋野岑子。貞雄女／同母姉妹、不明／最終位、不明

861（貞觀三年四月二十五日）廿五日己巳。文德天皇皇子。男二人女三人。未定名号。是日。或為親王。或為朝臣。惟恒親王。禮子內親王並母藤原「朝臣」氏。源朝臣行有母布勢氏。源朝臣富子母菅原氏。源朝臣淵子母滋野氏是也。『三代実録』

文德天皇：源滋子（貞觀三四賜姓。母滋野氏）／頭注按、滋子、三代実録作淵子『本朝皇胤紹運録』

文德天皇（皇女）：滋子（從是以下賜源姓貞觀三年四月賜源姓延喜十一年四月十二日薨）『一代要記』

文德天皇（女賜姓）：滋子『皇代記』（新校群書類從卷三十一）